



Data

監督・脚本・原作：九把刀（ギデンズ・コー）

出演：柯震東（クー・チェンドン）
 / 陳妍希（ミシェル・チェン）
 / 莊濠全（ジュアン・ハオチュエン）
 / 郝劭文（ステイブン・ハオ）
 / 蔡昌憲（ツイ・チェンシエン）
 / 鄒勝宇（イエン・シヨニユー）
 / 胡家瑋（フー・チアウエイ）
 / 柯義浚 / 王彩樺 / 賴炳輝

👁️👁️ みどころ

団塊世代の男女なら誰でも、舟木一夫が歌った『高校三年生』の歌詞を今でも覚えているはず。そんな「あの頃」を懐かしく思い出させてくれるのが、本作だ。

『九月に降る風（九降風）』（08年）と同じ青春群像劇だが、なぜ台湾映画にはこんなテーマの秀作が多いのだろうか？考えるのはアレだけ。高校生の男は誰でもそうだろうが、そこからどうやって大人になっていくの？また、同じ年なのになぜか大人めいた憧れの美少女に、いかにアプローチしていくの？たとうまくいかなかったって、その思い出だけで・・・。

長ったらしい邦題は長ったらしい原題をそのまま日本語にしたものだが、本作の良さはそれだけで十分！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■「あの頃」をさわやかな群像劇で！■□■

本作はほぼ無名のキャストながら、台湾で社会現象を巻き起こす大ヒットを遂げ、香港ではチャウ・シンチーの『カンフーハッスル』の記録を塗り替えて、中国語映画の歴代興収ナンバーワンを記録したらしい。台湾映画には、「思春期」という大切な言葉を思い出させてくれる『藍色夏恋（あいいろなつこい）』（02年）（『シネマルーム5』379頁参照）という秀作があった。また、『台北に舞う雪』（09年）（『シネマルーム24』143頁参照）や『台北の朝、僕は恋をする』（10年）（『シネマルーム26』66頁参照）という瑞々しい恋愛劇があった。さらに、本作に最もよく似た青春群像劇として『九月に降る風（九降風）』（08年）（『シネマルーム23』138頁参照）があった。日本でも、舟木一夫の『高校三年生』などが大ヒットしていた1960年代には、「学園モノ」の映画がたくさん

あった。そのため、日活では吉永小百合や和泉雅子、大映では姿美千子や高田美和などの青春スターが生まれていたが、さて今は？

本作は、台湾の人気作家・九把刀（ギデズ・コー）が書いた小説を自ら監督したもの。本作にいう「あの頃」とは、1994年。今から約20年前。そして台湾中西部の町、彰化にある中高一貫教育の学校で高校時代を過ごしている柯景騰（コー・チントン）（あだ名「コートン」）（柯震東／クー・チェンドン）を中心とした5人の悪友たちの青春時代だ。生物学的に女の方が男より先に成熟・成長するため、小学5、6年から高校1、2年まではどうしても女子の方が大人で、男子は幼稚と相場が決まっている。したがって、本作は冒頭から一貫して幼稚なことばかりにうつつを抜かす柯景騰を中心とした5人の高校生たちを映しだすが、柯景騰たちの目の先には、いつもクラス1の美女・沈佳宜（シェン・チアイ）（陳妍希／ミシェル・チェン）の姿があった。「あの頃」とは、まさにその頃。団塊世代の私たちなら誰もが持つ「あの頃」、そんな青春時代への懐かしさを、本作でじっくりと。



『あの頃、君を追いかけた』発売・販売元：マクザム
(C) Sony Music entertainment Taiwan Ltd.

■男子校は地獄で、男女共学は天国？■

愛媛県松山市の愛光学園という、男子ばかりの中高一貫校で中学・高校時代を過ごした私は、ずっと男子校は地獄！そう思っていたから、本作にみる男女共学は天国。一瞬そう思ったが、意外にそうでもないことが本作を観ているとよくわかる。頭の中はアレでいっぱい、将来のことを真剣に考えたこともないコートンがいつも一緒に遊んでいるのは、①

NBA選手のトレーディングカード収集が趣味のナルシスト野郎でクラス一番のバカ、曹国勝（ツァオ・グオジョン）（莊濠全／ジュアン・ハオチュエン）、②朝からホットドッグを食らいつくオデブちゃん、仲間の中では一番成績が優秀な謝明和（シエ・ミンハ）（あだ名「阿和（アハ）」）（郝劭文／ステイーブン・ハオ）、③無意識に股間を搔いてしまうことが癖の廖英宏（リャオ・インホン）（あだ名「マタカキ」）（蔡慧慧／ツイ・チェンシエン）、④四六時中、下半身が緊張しているムッツリスケベの許博淳（シュー・ボーチュン）（あだ名「勃起（ボーチ）」）（鄺勝宇／イエン・ションユ）の4人だ。担任の教師は美少女チアイーをコートンの「お目付役」に命じたから、コートンは半分嬉しいやら、半分疎ましいやら……。

この5人のワル友達が接点を持つ女子は、チアイーと、その親友で心霊現象が好きな胡家瑋（フー・チアウエイ）（胡家瑋／フー・チアウエイ）の2人。チアイーの優等生ぶりと比較すれば、5人の男の子たちの幼稚ぶりが顕著だ。私の高校時代は1964年4月～67年3月までだったが、彼らの1994～97年までの3年間の高校生活のハチャメチャぶりをまずはじっくり観察したい。そして、本来男女共学は楽しいはずだが、それなりの苦しさや試練があることを、しっかりと確認したい。

■□■この可愛い女優は、とても30歳には・・・■□■

童顔で癒し系顔の女優なら、多少年をとっていても女子高生役は十分務まるだろうが、本作で優等生の女子高生チアイーを演じている陳妍希は、1983年5月生まれだから現在30歳。本作出演時も既に27～28歳だったことを知って、ビックリ！陳妍希は2011年に公開された本作のヒロインを演じて一躍有名になり、癒し系の笑顔で全民女神（国民的女神）と呼ばれる存在になったそうだが、「女の化け方」とは何ともしごいものだ。

これに対して、コートンを演じた柯震東は1991年6月生まれだから、現実の2人は8歳も年が離れていることになる。したがって、そんな2人が同じ高校の教室で机を並べる同級生役を演じたら、一方が大人で他方が幼稚に見えるのは、ある意味当たり前……。しかして、今の日本で陳妍希と同じような癒し系の美女で、女子高生役を演じても全然違和感のない30歳前後の女優といえ、さて一体誰……？

■□■いつ「告白」を？それを妨げたものは？■□■

「高校三年生」といえば、それだけで大ヒット曲のタイトルになるくらい、多くの人々にとって最も思い出の多い1年間。そしてまた、小学6年生、中学3年生の時に経験した「別れ」以上に、重たい多くの「別れ」があるものだ。本作は、1994年に高校に入学した後、大学を卒業し社会人になる2005年までの約10年間を描いた男5人＋女2人の青春群像劇。大学に入ると高校時代の仲間たちとは別れ別れになり寂しいものだが、同時にそこには新しい「出会い」もいっぱいある。ずっとチアイーにホレていながらコートンがなかなかそれを「告白」できなかったのは、優等生のチアイーに比べて自分のレベルが低いという認識はもちろんあったが、それ以上にコートンの幼さ、幼稚さの方が大きかったためだ。

コートンに比べるとチアイーの方はずっと大人だから、高校を卒業する時に「コートンが告白してくれれば、それに応じるのに・・・」と親友のチアウェイに語っていたのだが、幼稚なコートンがそんなチアイーの気持を理解することができなかったのは、ある意味仕方なし・・・？

■□もう一度、やり直せるなら？■□

本作に見る、大学に入ってからのコートンとチアイーの付き合いは、私には少し違和感があるが、ここでも2人の結びつきを妨げたのは、すべてコートンの幼稚さだ。高校時代に李小龍（ブルース・リー）に憧れて密かにその訓練を積むのは、『みなさん、さようなら』（12年）で見た「ぼくは一生、団地の中だけで生きていく！」と宣言し、団地を一步も出なかった渡会悟くん（濱田岳）と同じ『シネマルーム30』226頁参照）だが、大学に入ってまで格闘技大会にうつつを抜かずとは何という幼稚さだ。

それに対して、更に着実に一歩ずつ成長していくチアイーは、コートンと別れた後半年ほどはアハの要望を受け入れて付き合ったものの、結局高校時代の仲間たちとは全く違う大人の男と結婚することに・・・。

招待されたチアイーの結婚式でコートンを中心とする男5人女1人の同級生たちが見せるパフォーマンスは何とも楽しいものだからこりゃ必見！しかし、基本的にこれも幼稚だ。もっとも、いくら幼稚でもいいから、もう一度やり直せるものなら、俺もあんな時代に戻りたいのだが・・・。

2013（平成25）年8月8日記



『あの頃、君を追いかけた』発売・販売元：マクザム
(C) Sony Music entertainment Taiwan Ltd.